



第94回(平成26年2月12日)定例会の研究発表要旨

昭和8(1933)年手稲村の地図から見えて来るもの

富丘 野村武雄氏



当時の村・道・日本・世界では何かがと問いながら OHP (本会初購入品) で写真等を投影しキーワードとエピソードを交え説明。

① ~ ③本会は手稲区域内にこだわらず開拓前から人的物的交流が深い石狩・札幌地域生活史の研究・発表の場とし、地図のように当時村は3大字地域の時代(上手稲・下手稲・山口)。その頃大保養・観光地だった滝ノ沢(現金山)・軽川(現富丘)両温泉。手稲・24軒通り沿い(旧国道)の藤の湯鉱泉(現在唯一の銭湯)の繁昌ぶり経営者達の小寺アキ、村上藤吉らの役割を紹介。次に現存する手稲神社、祥竜寺、兼正寺、当時の北

日本飛行学校の飛行場(ひばりが岡、現曙町内会館地域)を説明。

次に④ ~ ⑤駐在所(警察)と旧役場は現コープさっぽろ手稲店の道路向い(バス停辺り)本町1条1丁目にあった。明治21(1888)上手稲から戸長役場を移し、明治34年新築落成式(戸長個人宅から庁舎へ)写真を投影。当時の国道向いには篠原製鋼(ローブ)工場、日之出屋菓子工場(せんべい、パン、生菓子等30種)が出来、三樽別、富丘地域は村の中心部であった。

昭和7年輕川小学校(現中央小)作成ガリ版刷り『郷土研究』を投影、今はない工場、養狐場も栄えていた事を話す。併せて明治30年三樽別川辺に創設された村唯一の赤レンガ製油工場のカラー記録写真を投影(大豆・亜麻・菜種油)経営者3代の乙黒定七元町議会議長・町消防団長の写真とエピソード紹介。昭和40年以前低湿地、大小の沼と河川で大水害多発時代、稲積・前田地域水浸し多数の牛乳が乳房冷えダメになる、ピンチ、町の要請に決断し工場の石炭ガラ山を崩し、製品用の吹(藁筵袋)で土袋を急造。ボートで運び乳牛の足下に積上げ乳房も命も救い感謝されたと伝える。

このサンダロッキヒ(三樽別)は鹿を荷縄で縛り下す処のアイヌ語といわれ開拓使が通行屋(人馬宿泊、茶食供す)を設けた地域で丸山(軽川の語源トシリパオマナイ → 国作りの神の墓のある丸山の上手の川)がある。村民スキー場(141米)であった。スズラン大群落地、軽川温泉、縄文遺跡群、ストーンサークル跡等が周りにある。初期には鶴も見えたという。誰かぜひ創作民話の題材に……。最後に舟木旅館(駅前ステーションホテル)、軽川駅と新国道、軽石軌道、山口運河を投影紹介して終わった。

次回の予定

次回(4月16日)は、定例総会及び懇親会です。

会場は、第1・2会議室です。

流氷の世界 — 映像から見た自然の魅力と変化

星置 菊地 慶一 氏

私は網走市在住の45年間、オホーツク海を眼下にし、知床連峰を望む高台に住まいしてきた。そのため冬季は流氷到来から消去までをつぶさに観察できたが、流氷研究者などではなく単なる観察者に過ぎない。しかし、流氷の見える丘という立地条件をいかし、多くの流氷本を書くことができた。それは単に流氷の紹介だけでなく、オホーツクの風土と流氷、流氷と人々の暮らしを記録に残すことを心がけてきたのである。



流氷の魅力は何かと、問われると一口で言うのは難しいが、オホーツク海という自然が見せる変幻自在の姿ではなかったか。夏のオホーツクは、まるで内海のようにおだやかな表情を見せる。秋には群青の海面がきらめき、漁業の生産現場として活況を見せていた海が、流氷到来によってとつぜん閉ざされる。動から静への変貌が、これほど大きい海はない。北極でも南極でもない北緯44度という生活現場の海が氷野となって、静かに冬ごもりに入るというのは希有なことではないのか。これはオホーツクという特異な海の、流氷発生のメカにズムよる奇跡的な現象なのである。

これから写す映像は私が撮りためてきたもの、蒐集したものの中から一部をお見せするのだが、科学的な説明はさけるので、とにかく楽しく見ていただきたい。

流氷映像投影

ここまで流氷を見ていただいて、お気づきの通り、オホーツク海の流氷は劇的な変化ではないが、長期的には減少していることがわかりいただけたと思う。

海氷域面積は、10年あたり5.8万平方キロメートルの減少となっており、この値はオホーツク海の全面積の3.7%に相当する。気温も海水温も少しずつ上昇している。

私は流氷の減少を素人的だが早くから予測し、到来しなくなるのではないかという警告をして来た。しかし、幸か不幸か私の予想は外れてオホーツク海の流氷は依然として発生を続けている。このため私はオオカミ少年ならぬ、オオカミじいと呼ばれてきたのだ。しかし、現在の流氷発生は奇跡にも近い。なぜなら地球温暖化によって氷山の溶解や、大雨、大雪など異常気象が続出している。今後当然オホーツク海の変化も見られるだろう。

1月の例会の加藤邦雄さんの話に、エチゼンクラゲの漂流経路と古代の文化の伝播が海流によるという示唆があったが、オホーツク文化もオホーツク人の消長もまさしく海流にあった。文化と民族の移動は海流によるものが大きいのではないかと。海流は地球上のすべての海とつながっている。どこかの海の変化は遅くも早くも海流とともに循環し、世界を一周すると言われている。温暖化も、氷山の崩壊も、環境汚染も、放射能汚染も、いつかはすべての海に影響するのである。

この現実を私たちは無視することはできない。これをどう受け止めどのように生きて行くかという課題に当面しているのではないのか。